

## 【論 説】

## 『権力への道』と「消耗戦略」

——カウツキー研究序説——

大 野 節 夫

## 序

カール・カウツキーは、第2インターナショナルと第1次大戦前のドイツ社会民主党 (SPD) の代表的理論家であった。今日では、カウツキーは、第1次大戦勃発とともにマルクス主義理論から離反したことと、彼の帝国主義論がレーニンから批判されたことによって知られている。

レーニンは、カウツキーの帝国主義論を自分の理論とまったく対立するものとみなした。いうまでもなく、レーニンの帝国主義論は、1. 帝国主義は資本主義の独占段階である、2. 帝国主義は寄生的な資本主義である、3. 帝国主義は死滅しつつある資本主義である、との規定を内容としている。このレーニンの規定からみれば、カウツキーの帝国主義論は、1. 3. の規定において対立し、2. の規定を無視するものであった。

したがって、レーニンの批判は、カウツキーの次の2点に集中している。1)

(1) カウツキーが、帝国主義を経済の「局面」あるいは段階と理解すべきではなくて、政策と、すなわち金融資本によって「好んでもちいられる」一定の政策と理解すべき、とする点が問題となる。

---

1) 以下、レーニン『帝国主義論』(国民文庫)第7、9章参照。

レーニンは、これに対して、この主張の基礎には、彼のあやまった帝国主義の定義——産業資本、農業地域の併合、民族問題の3つの要素からなりたっている<sup>2)</sup>——があることをまず指摘する。そして、レーニンは、カウツキーが帝国主義を金融資本の政策としていることをとりあげ<sup>3)</sup>、彼の主張の本質を「帝国主義の政策をその経済から切りはなし、併合を金融資本によって『好んでもちいられる』政策だと説明し、この政策に、金融資本というこのおなじ基盤のうえで可能であるという他のブルジョアの政策を対置している<sup>4)</sup>」ことであると批判している。

(2) レーニンは、またカウツキーの超帝国主義論を取りあげる。カウツキーは、帝国主義が資本主義の死滅の段階ではなく、さらにいっそう高い段階、すなわち超帝国主義の段階にいたる可能性を示した。この段階は、一方では独占によって平和を達成する段階であり、他方では階級斗争の最終的激化の段階であるとみなされたのである。<sup>5)</sup>

レーニンは、この超帝国主義論を現在の状況においては死んだ抽象であると批判する。なぜなら、この主張は、一方では金融資本の支配がまさに世界経済内部の不均等性と矛盾とを激化せしめていることに目をつぶるものであり、他方で金融資本の支配が平和的斗争と非平和的斗争の形態を生みだしているのに対し、この交替を一面化するものだからである。

以上の2点と、さらにつけ加えてカウツキーが帝国主義に固有な寄生性を

2) このカウツキーの帝国主義の定義(レーニン、同前、117~8頁。Karl Kautsky. Der Imperialismus, in: Die Neue Zeit, 32 Jg., Bd. ii, S. 909 (NZ. 32, ii, S.909). 波多野真訳『帝国主義論』(創元文庫)、7頁参照)における「産業資本主義」は農業と対比されるべき「工業資本主義」ともいうべき内容をもつ。

3) カウツキーは、帝国主義を、その経済法則の点では、農業に対する工業の関係でとらえ(前出の定義をみよ)、その政策主体の点では、金融資本にみいだすというかたちで、とらえていた。

4) レーニン、前掲書、120頁。

5) Vgl. Kautsky, Der imperialistische Krieg, in: NZ. 35, i, S. 483. 波多野真訳、109頁参照。

無視していることとをもって<sup>6)</sup>、レーニンは、その帝国主義論に示されるカウツキーの転落を、マルクス主義理論およびマルクス主義的实践と断絶し、ブルジョア改良主義と平和主義におちいったと特徴づけている。

事実、カウツキーは第1次大戦において改良主義と平和主義の立場に転化し、それでもって、レーニンの「帝国主義はプロレタリアートの社会革命の前夜である」という規定<sup>7)</sup>と根本的に異質な立場にたった。これによって、レーニンとカウツキーとはマルクス主義の言葉でかたる社会主義者の対極にたつことになったのである。

だが、本稿で問題にすることは、レーニンの批判をくりかえすことではない。第2インターとSPDとの代表的なマルクス主義理論家であったカウツキーが、なぜ、上叙の改良主義者、平和主義者にマルクス主義の言葉を用いながら転化したかを明らかにすることである。

実際、カウツキーははじめからレーニンに批判されたような帝国主義論をもっていたのではなく、また改良主義者、平和主義者ではなかった。たとえば、1901年にカウツキーは書いている。「……今日の生産様式という観点でだけ（問題にするならば）、世界戦争は不可避である。しかし、プロレタリアの観点、すなわち社会主義的観点からするならば、それは不可避ではない。世界戦争は今日の破滅にむかいつつある世界商業体制の一方の選択であり、他方の選択は社会主義社会である。」<sup>8)</sup>ここには世界戦争か社会主義かの二者択一がのべられている。そして、これがカウツキーの帝国主義論のほぼ出発点をなすものであった。

カウツキーは、この帝国主義認識から出発し、さきの認識に到達したのである。しかも、この到達の過程は、カウツキー自身のおりにふれての言明<sup>9)</sup>

6) レーニン、前掲書、16頁参照。

7) 同前、17頁。

8) Kautsky, Handelspolitik und Sozialdemokratie, Berlin 1901, S. 91. なお、引用文中の( )の挿入語句は引用者のもの、以下特に記してないかぎりとは同じとする。

にみられるように、自覚的な過程ではない。それは客観的にみても（これ自体証明を要するが）現実に対応させようとしたカウツキーの理論の発展過程に他ならないものであった。したがって、問題はこの発展過程を明らかにすることにある。

ところで、カウツキーの出発点をなすさきの帝国主義はカウツキー一人のものではなく、ほぼ、修正主義に反対するマルクス主義正統派の共有の見解ということのできるものであった。したがってこの出発点と第1次大戦における帰結とは、ほぼ共通の見解から出発しながらも、レーニン対カウツキーを対極にするような見解の分化があったことを示している。そして、この見解の分化の原因を問うならば、まさにマルクス主義を発展させようとしたことにある。つまり、当時のマルクス主義者はマルクス主義を、世界史的に新たな時代、すなわち独占と帝国主義の時代に対応させ、発展させる問題に直面していたのである。マルクス・エンゲルスによって作りあげられたマルクス主義を、両者の亡き後、どのように継承し、どのように帝国主義時代に発展させるかの問題である。

カウツキーも、この問題にたちむかった1人であった。<sup>10)</sup> 彼は結果的にはマルクス主義を改良主義化してしまったのである。だがこのようなカウツキーの経過を明らかにすることはあながち無駄とはいえないであろう。なぜならこの探求は、背面からではあるが、マルクス主義が帝国主義の時代に対応し発展するにはなにが必要かを一定程度明らかにするものとなりうるであろうから。

にもかかわらず、従来のカウツキーに関する研究の傾向は、彼の理論をた

---

9) たとえば、『『権力への道』の第3版への序文』(1920年)をみよ。Vgl. Kautsky. *Der Weg zur Macht*, Dritte Auflage, 1920. 奥田八二訳『権力への道』, (河出書房『世界大思想全集』社会・宗教・科学思想篇14, カウツキー・ブレハーノフ集所収)。

10) この観点から、カウツキーをとらえようとするものに、Annelies Laschitzka, *Karl Kautsky und der Zentrismus*, in: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*, (BzG) Heft 5, 1968 がある。

だ否定の対象として問題にするものであった。<sup>11)</sup> これらの多くはカウツキーがどのようにマルクス主義を発展させようとしたか、なぜ脱マルクス主義化したかをじゆうぶんに明らかにしてはいない。

このような状況は、カウツキーのマルクス主義史上の位置を考えたさい、やはり不十分なものである。というのは、カウツキー理論は、マルクス主義史上一時期を画するSPDにおいて正統マルクス主義の理論とみられ、また同時代のマルクス主義者は、多かれ少なかれ、カウツキーの理論の諸要素のどれかを共有していたのであるし、また、カウツキーをいかに批判し、克服するかという問題は、現実には、その後のマルクス主義の発展に1つの規定性を与えたというものであるからである。<sup>12)</sup>

本稿は以上の問題解明の出発点をなすものである。<sup>13)</sup>

## I

カウツキーは 1909年に『権力への道』を書いている。それは、カウツキーにとって「最後で最良の書」といわれている。<sup>14)</sup> 最良といわれうるのは、本書がこれまで右派批判をおこなってきたカウツキーの右派批判として頂点に達したものであるからに他ならない。だが、そればかりでない。本書は、1910年以後急速に展開した左派批判の諸要素もすでにふくまれているもので

11) この典型的なものとして、カウツキーははじめからマルクス主義者でないとするものがある。Vgl. Erich Matthias, Kautsky und der Kautskyanismus, in: Marxismusstudien, 2 Jg.

12) Vgl. Karl Korsch, Der gegenwärtige Stand des Problems "Marxismus und Philosophie," in: Marxismus und Philosophie, Zweite Auflage, 1930. 平井俊彦・岡崎幹郎訳, 『『マルクス主義と哲学』問題の現状』、『未来』No. 49-51, 所収, 参照。コルシュの場合、カウツキーとレーニンとを哲学的には同一視し、それをこえるマルクス主義の発展をさぐっている。

13) 本稿につづけて1912年のSPD内の軍縮論争に関する論稿を予定している。

14) レーニン、『国家と革命』『全集』(大月書店)第25巻, 522頁。また、レーニンの評価として、『死んだ排外主義と生きている社会主義』, 同上, 第21巻, 85-92頁をみよ。

ある。この点において本書は「転回点」にたつ。<sup>15)</sup> それだからわれわれは、本書の分析を出発点にしよう。

『権力への道』はなによりも右派<sup>16)</sup>批判の書である。本書の特徴、すなわち、カウツキーにとって最良の書であることは、次の点にあった。カウツキーは、ここでは、たんにベルンシュタインの修正主義批判のときのようにマルクスの学説をもって反論をおこなっているのではなく、一定の帝国主義論にもとづいて積極的に現状を解明し、これをもって反論をおこなっていることである。

カウツキーは右派の考えを「改良による社会主義社会への熟成論」と特徴づけ、「この理論は非常に現実的な内容をもっている。それは、われわれが実際に社会主義に向かって成長していることを証明する現実の発展の諸事実にもとづいている。」という。<sup>17)</sup> その事実とは、一つは銀行と企業家組織が種々の国々の資本家企業の大部分を支配し、組織していることであり、他は労働者階級の改良の進行であり、労働者の力の増大である。右派はこの事実から、「平和なめだたない階級の止揚」すなわち社会主義社会への熟成をみている。だが、カウツキーからすれば、この事実が示すことは、「相互に橋渡しのできない敵対的關係にたつ対立する両階級の力の成長に他ならない」ので

15) Vgl. Gerd Irrlitz, Bemerkungen über die Einheit politischer und theoretischer Wesenszüge des Zentrismus in der deutschen Sozialdemokratie, in: BzG. Heft 1, 1966, S. 53.

16) カウツキー『権力への道』は、第一版序文に示められているように M. Maurenbrecher との論争から生れたものである。マーレンブルッフヒャは、カウツキーを次のように批判した。「もっかのところ議会活動による改良の道が、労働者階級をひきあげ、その政治的力と国家への影響とをもたらす唯一の道である。」なぜなら「ドイツでは近いうちには革命的発展の時期を期待しえない」からである。マーレンブルッフヒャは、戦術をかえること、自由主義者との連合を主張する。「われわれはまさに現実がいったん革命でもってクーデターに答えぬばならないばあい、どのようにしたならば、われわれに長く属さず、われわれに投票もしてこなかったような住民の圧倒的多数に、革命への情熱をひきおこせようか。」(M. Maurenbrecher, Offener Brief zu Genossen Kautsky, in: NZ. 27, i, SS. 148—153.) これに対する回答が『権力への道』である。

17) Kautsky, Der Weg zur Macht, 1920, S. 38. 訳, 204頁。

ある。すなわち、「個々の労働者と資本家とのあいだにする対立が、労働者と資本家とが組織されて相対する……」方向にすすんでいるのであり、「階級対立の不断の激化，決定的な大階級斗争の時代への熟成」である。<sup>18)</sup>

このかぎりでは、このカウツキーの右派批判は、ベルンシュタイン批判の水準をでるものではない。右派は階級対立の無視という「小さな誤り」をおかしているにすぎず、カウツキーは経済の発展とともに階級対立が尖鋭化することの確認をおこなっているだけである。もちろんこの階級対立の尖鋭化とともに、カウツキーは、プロレタリアートによる政治権力の獲得の不可欠性を強調する。

この問題に関連して、右派は次のマルクス主義批判をおこなってきた。すなわち、右派は、マルクス主義がすべてを経済過程にながしこみ、人間の自由な意思と主体性を否定するものであると批判する。これに対し、カウツキーは、人間の意思の自由を否定するが、意思の役割を否定するものではないと反論する。「すべての経済現象の原動力は人間の意思である……もちろん、ここでは自由な意思ではなく、……それは結局すべての経済の基礎となっている生きんとする意思 (der Wille zu leben) である。」「意思はこの(経済)過程の出発点であって全経済現象に滲透している。意思と経済とを相互に独立している二つの要素とみるほど不合理なことはない。」<sup>19)</sup>ここにみられるように、カウツキーは「生きんとする意思」を根底におくことで意思と経済との同一化をはかろうとしたのである。右派、とりわけ倫理的要素を独自にみとめようとする新カント派的傾向によるマルクス主義批判と補充にたいして、意思を唯物論的に把握しようとすることで対抗したのである。<sup>20)</sup>

18) *ibid.*, SS. 38-41, 訳, 204-206頁。

19) *ibid.*, SS. 44-5, 48, 訳, 210, 212頁。

20) カウツキーは、新カント派的傾向のみならず、ダーウィニズムをも批判する。Vgl. Kautsky, *Ethik und materialistische Geschichtsauffassung*, 1906. だが、意思と経済との同一化の根底に「生きんとする意思」をおくとき、この同一化は、客観的にたしかめうる経済過程に主体をになわせることになる。

だが、この唯物論的把握の志向を、革命における階級斗争の主体的役割の把握にまで延長するとき、カウツキーは、階級斗争を経済過程に従属させる傾向を生じさせている。カウツキーはいう。「プロレタリアートの諸力は資本主義社会の一定の状態においては、その経済関係によって規定されていて恣意的に増大しえない」ものであり、社会民主主義の理論は、この「プロレタリアートの諸力を最もよく目的に合致するように使用することを教え、その浪費を阻止することでプロレタリアートの可能な力の展開を最高に高める」ことにあり、またプロレタリアートの「個人的要求」を社会的改造の要求にひきあげることである、と。<sup>21)</sup> ここにあらわれているのは、社会主義社会を実現する場が階級斗争にあることの軽視の傾向であり、経済過程にそれを埋没させる傾向である。<sup>22)</sup>

では、カウツキーは、この経済過程をどのようにとらえていたのか、いいかえれば、現在の状況は革命的状況にあるのか。これに答をだすことが、右派批判としてももっとも積極的なものになるのはあきらかであり、『権力への道』を最良の書たらしめているものである。

カウツキーはいう。「諸関係は90年代のはじめから根本的に変った。……われわれはいまや国家制度と国家権力をめぐる斗争にはいった……」と。<sup>23)</sup> 彼はこの言明の根拠をなによりも帝国主義の登場とその進展にもとめている。彼によれば、1848年から1870年にかけて「ヨーロッパの諸民族のすべての階級は、プロレタリアートをのぞいて、その生存を構築しうる国家の土台をつくりだした。」<sup>24)</sup> そして、1880年以後、資本主義的生産は新たな発展をとげ、世界市場の拡大、新しい植民地政策すなわち「海外領域のヨーロッパ

---

21) Der Weg zur Macht, S. 50, 51 訳, 214, 5頁.

22) カウツキーのこの傾向が、「実証主義あるいはダーウィニズム」の影響とみるかどうかは本稿の範囲外に属する.

23) ibid., S. 65. 訳, 230頁.

24) ibid., S. 75. 訳, 237頁.



国家領域への編入、いわゆる帝国主義」がブルジョアジーの「新しい理想」として生じた。<sup>25)</sup> 帝国主義はまた、増大しつつあるプロレタリアートの社会主義に対抗する役割をもつものでもあった。ブルジョアジーは、企業家連合を成立せしめて、物価騰貴を蔓延せしめ、賃金をさげ、社会改良を停滞<sup>26)</sup>せしめている。「純粹の労働組合的方法によってはプロレタリアートを再び力強く前進させようと、われわれは期待してはならない」<sup>27)</sup> ところにきているのである。すなわち、帝国主義は「プロレタリアートの活動の重点(を)最近20年間に再びよりいっそう政治に移している。」<sup>28)</sup> これによって、「……政治斗争、権力移動、および変革の必然性もまた与えられている。」<sup>29)</sup> 以上の論理から、カウツキーはプロレタリアートの前に提起されている二者択一が、帝国主義か社会主義かであると結論する。<sup>30)</sup>

だが、事態はここにとどまっていない。登場した帝国主義自身がいっそう革命的状況をつくりだしているとカウツキーはいう。どのようにか。

ブルジョアジーにとって、帝国主義は「唯一の希望であり、唯一のイデー」であるが、多くの困難をつくりだし、いまや戦争をひきおこさんとしている。すなわち、帝国主義は二つの側面で矛盾を激化せしめている。一方では、その世界政策を遂行するために軍備増強をはからねばならず、それが労働者に軍事費を負担せしめるのみならず、さらにその増大は「結局、工業の

25) *ibid.*, SS. 78-9. 訳, 241頁.

26) カウツキーはこの「停滞」を完全な停止でなく、困難化の意味で用いている。この点において、Otto Bauer との論点となった。Vgl. Kautsky, *Positive Arbeit und Revolution*, in: NZ. 27, ii, SS. 324-337. 又、カウツキーは、この原因に企業家連合の出現をみているが、この認識は、ヒルファーディングの『金融資本論』の第24章と共通している。

27) *Der Weg zur Macht*, S. 86. 訳, 247頁.

28) *ibid.*, S. 89. 訳, 250頁.

29) *ibid.*, S. 94. 訳, 254頁.

30) 「しかし、われわれがみてきた帝国主義は、現存の社会にまだウィンクをする未来への唯一の希望、唯一のイデーである。その他にはもう一つの選択、社会主義があるだけである。」(*ibid.*, S. 99, 訳, 258頁)。これはまた、1900年ごろからの左派の共通認識であった。Vgl. H. Ch. Schröder, *Sozialismus und Imperialismus*, 1968, S. 7.

進歩自体をも麻痺させざるをえない」<sup>31)</sup> ところにたどりつくし、「軍備競争は国民的対立を激化」せしめている。他方では、帝国主義に固有の資本輸出(カウツキーは生産手段の輸出と素材的にみるが)<sup>32)</sup>は、非ヨーロッパとりわけ東洋に資本主義を生ぜせしめて、ヨーロッパの競争者にしたてているし、またヨーロッパの搾取へ反抗を生みだしている。<sup>33)</sup> つけ加えて、カウツキーはヨーロッパの支配階級の道徳的崩壊も進行していることを指摘している。したがって、これらのことから「東洋の政治的不安が西洋の政治的不安ともなり、……不安、不信、動揺がいたるところにあって、軍備競争ですでに高められてきた神経過敏は頂点にまでいたっている。今では世界戦争はほんのそこまでおしすすめられている」<sup>34)</sup> ことをみちびきだしている。このような状況では、革命か戦争かの選択が提起されている。<sup>35)</sup> 今日「戦争に尻ごみさせているのは……プロレタリアートの増大する力なのである」<sup>36)</sup> が、プロレタリアートは、戦争になろうとなるまいと革命をなしとげるであろう。現状はまさに革命的状況に、「一般的不安の時代、不断の権力移動の時代に突入している。」<sup>37)</sup>

これが、カウツキーの右派にたいする現状認識の回答である。また、『権力への道』の「根本内容」である。要約すれば、帝国主義の時代とともに帝国主義か社会主義かが提起され、現在の時点では戦争か革命かが提起されて

31) Der Weg zur Macht S. 101. 訳, 260頁

32) Vgl. *ibid.*, S. 102. 訳, 261-2頁. カウツキーには、価値視点より素材視点で経済法則をとらえる傾向が強い。

33) 単純に、資本輸出が被輸出国の資本主義を発展せしめ、輸出国との競争者にまでしたてるという考えは、前記の素材視点もさることながら、日本の資本主義的發展の像があった。

34) *ibid.*, S. 105. 訳, 264頁.

35) 「武装平和のあとよりも戦争のあとの方が革命にちかいという選択がなかったならば、この狂気じみた相互の国債増加という状態から生ずるのは、革命とならんで、唯一の選択としての戦争であり、それにとっくの昔にこの状態はすすんでいったであろう。」(*ibid.*, S. 101. 訳, 260-1頁.)

36) *ibid.*, 訳, 261頁.

37) *ibid.*, S. 110. 訳, 270頁.

おり、「もはや時期尚早の革命は問題にならない」<sup>38)</sup>ような革命の時代であることを主張したのである。

では、『権力への道』はプロレタリアートにどのような任務と戦術を示しているのでしょうか。

カウツキーは、ドイツのプロレタリアートの当面の任務を「プロレタリアートは自己の斗争を行なっている国家の基礎を変えらることなしではもはや前進できない。帝国内の民主政治、そして個々の邦、ことにプロイセンとザクセンの民主政治を獲得すること、これがドイツのプロレタリアートのもっとも大切な任務であり、世界政策と軍国主義に対する斗争はそのもっとも大切な国際的任務である」<sup>39)</sup>と提起している。一言でいえば、「民主主義の獲得と軍国主義の除去」<sup>40)</sup>である。注目すべきは、民主主義の獲得であって、社会主義ではないことであり、またその中にはドイツ全体の共和国でなく、「プロイセンとザクセンの民主政治」の獲得が強調されていることである。

しかも、カウツキーは、この任務をプロレタリア革命として設定している。カウツキーはいう。「プロレタリアートは、みづから国家における支配的地位につくことなしには、……民主主義と軍国主義の除去を達成しえない」<sup>41)</sup>と。それゆえ、カウツキーは、当面する革命を、第1にプロレタリア革命として、第2にはさしあたり反軍国主義と民主主義獲得の革命として設定する志向をしていたといえよう。<sup>42)</sup>

他方、そのための手段についてカウツキーは「従来すでもちいられていたもの以外になお大衆ストライキがある」<sup>43)</sup>とのべ、「個々の場合にわれわれ

38) *ibid.*, S. 105. 訳, 264頁。ただし、この命題には、「あたえられた国家的基盤からプロレタリアートが吸収しうる以上に吸収してしまったならば」というただし書きがついている。

39) *ibid.*, S. 110. 訳, 268頁。他に Vgl. S. 91. 訳, 251-2頁参照。

40) *ibid.*, S. 94. 訳, 254頁。

41) *ibid.*, 訳, 同上。

42) カウツキーには、反封建反独占の革命ということが萌芽的には存在していた。だが、それは萌芽的ではない。

43) *ibid.*, S. 110. 訳, 268頁。

の斗争がいかなるかたちをとるかについては……「言いえない」<sup>44)</sup>とのべるにとどまっている。このことは、革命的状況に従来の戦術、すなわち、議会・選挙斗争、デモンストレーション、労働組合の合法的斗争手段でもって対応しうるものとみていたことを意味する。また、当然 そうなるものでもあった。というのは、カウツキーの規定した革命的状況は基本的には1890年以降のもののみなされていたのであり、そのとき以後、多くの成果をあげてきた有効な戦術として、あらためておこなった革命的状況の確認にさいしても追認する他なかったからである。だが、のちに、この点をめぐって多くの問題をひきおこしていく。

以上の『権力への道』の内容について、いくつかの問題<sup>45)</sup>を指摘できよう。とりわけここでは、革命的状況の把握そのものに内在する問題とそれに対応する諸階級の関係に関する問題について論及しておこう。

カウツキーは、たしかに現在、革命的状況にはいっていることを指摘した。だが、この規定を成立させている諸要素を検討するとき、そこにいくつかの問題をみいだすことができよう。

第1に、世界戦争の不可避性についてである。カウツキーは、『権力への道』では、たしかに世界戦争の不可避性を論じているが、その立論の根拠をなしているのは、「軍備競争は国民的対立を激化せしめている」ということであって、帝国主義国間の再分割斗争に根拠を求めているとはいえない。このことにまた「軍国主義の除去」ということ自体が当面の任務の一つになっていることも対応している。

第2に、上記の問題に関連しているが、カウツキーに帝国主義の停滞という認識があったことである。それは、「かくして帝国主義は停滞させられた。それはもはや進むことはできない」<sup>46)</sup>というかたちで明白にあらわれている。

44) *ibid.*, S. 112. 訳, 270頁.

45) たとえば、国家論の問題、レーニン『国家と革命』参照.

46) *ibid.*, S. 103, 訳, 262頁.

というのは、一方での軍国主義の伸展が一定の困難にむかいつつあり、他方で東洋の資本主義化およびヨーロッパへの反抗が生じているからであった。このような根拠から彼がとくに1909年に「帝国主義の停滞」を立論するとき、現実の一定の反映があったことはあきらかである。だが、事態を一義的に「帝国主義の停滞」とみること、およびこれと結びつけて植民政策を純経済的利益とのみ関連させる傾向<sup>47)</sup>—これは、第1次大戦中の彼の帝国主義に強力に示される<sup>48)</sup>—を生じせしめていることはきわめて重視すべきである。

カウツキーにおける「帝国主義の停滞」論は、第1には『権力への道』ではじめてあらわれたものである。この点に関してカウツキーの帝国主義論の展開をみるならば、1898年の論文「新旧植民地論」では、帝国主義をイギリスにたいするドイツなどの後発資本主義国のおくれた支配層の暴力的な世界政策と規定していたが<sup>49)</sup>、1900年にはこの規定の批判のうえで、資本主義に普遍的な現象として、重工業資本、高金融を主体とする資本主義に必然的な世界政策とみることには到達した。<sup>50)</sup>レーニンが、この時期こそ、世界分割が終了し、世界体制としての帝国主義の段階の開始と規定しているのに対応する。だが、1909年の『権力への道』においては、前述の根拠からはやくも「帝国主義の停滞」をみちびきだしているのである。実際、このことに対応して『権力への道』において帝国主義をまだなお「新しい理想」「将来への唯一の希望であり、唯一のイデオ」<sup>51)</sup>ととらえているままである。

それは、第2に、世界の再分割斗争の契機をみうしなわせることになる。この点はすでにみたように、戦争の不可避性を再分割斗争と結びつけず、ただ世界政策の「権力手段」としてとらえられた軍備とより結びつけられてい

47) Vgl. *ibid.*, SS. 78—9. 訳, 240—1頁.

48) レーニンは、『帝国主義論』において、カウツキーのこの傾向を批判している。146頁参照.

49) Vgl. Kautsky, *Ältere und neuere Kolonialpolitik*, in: NZ. 16, i.

50) Vgl. Kautsky, *Schippel, Brentano und die Flottenvorlage*, in: NZ. 18, i.

51) *Der Weg zur Macht*, SS. 79, 99. 訳, 241, 258頁.

ることに関連しているのである。

「帝国主義の停滞」論は、第3に、カウツキーのこののちの帝国主義論の基本的な前提をなすものになる。

では、革命的状況という規定のもとで、カウツキーは、諸階級の間をどのようにとらえていたのか。

結論からいえば、帝国主義が登場したことは、プロレタリアートを他の階級、階層から孤立せしめたのである。<sup>52)</sup>これがカウツキーの認識であった。

「この（帝国主義）政策は、プロレタリアートの孤立を完全にすることをよびおこす」と。<sup>53)</sup>この見解は、他面で「『反動的大衆』という言葉が真理になってしまっているまさに今」<sup>54)</sup>という認識と表裏になっている。カウツキーは、まさにこの認識から出発して、右派の主張するブルジョア政党との連立、同盟へ拒否はもちろん小ブルジョア層との同盟をも不可能とみなし、ただブルジョアジーと小ブルジョア層の間の矛盾を利用する見地<sup>55)</sup>をみとめるだけで、SPDに「依然として不動揺であり、首尾一貫しており、非宥和的である」<sup>56)</sup>ことを求めるのである。

52) カウツキーは、1907年の選挙にさいして、次の総括をしている。「植民地をもつ未来国家の魅力的作用は、全ブルジョア世界に、また植民地に経済的な利益をもたない連中にもはたらきかけ、社会民主党の未来国家へのつる恐怖と結びついている」とのべている。Kautsky, 25. Januar, in: NZ. 25, i, SS. 589—590.

53) Der Weg zur Macht, S. 97. 訳 257頁。当時、帝国主義がプロレタリアートを孤立させるとみたことは、具体的にみるかぎり一定の妥当性をもった一般的認識であった。レーニンの『帝国主義論』142頁参照。

54) *ibid.*, S. 111. 訳, 269頁。

55) Vgl. *ibid.*, S. 27. 訳, 195頁参照。カウツキーは、「反動的大衆」という言葉をそのまま認めているのでない。1896年に彼はベルンシュタインあての手紙でのべている。「われわれは大きくなって、たんにデモンストレーションの党にとどまっていることはできない。われわれの戦術は変えらねばならない。われわれは他の党と（大衆かれらはなんら反動的大衆ではない）を、ときに応じて一方か他方かと協同するために研究せねばならない。われわれは妥協政策をもちいる。それはわれわれの運動の階級の性格をかくすことではない。」(Brief Kautskys an Bernstein vom 8. 12. 1896. Zit. H. J. Steinberg, Sozialismus und deutsche Sozialdemokratie, 1969, S. 79).

このような見地がエンゲルスの『『フランスにおける階級斗争』の序文』とは異質なものであった。エンゲルスは「……あらかじめ人民の大多数を、すなわちこの国(フランス)では農民を、獲得しないかぎり、永続的な勝利はありえない……」<sup>57)</sup>という原則をのべ、同時にドイツでは「われわれは、今世紀の終りまでには、社会の中間層、小ブルジョアや小農民を獲得する……」<sup>58)</sup>みとおしをたてていたのであった。これに対し、カウツキーは、エンゲルスの原則を無視し、ただエンゲルスのみとおしをあやまっていたとしたのである。<sup>59)</sup>このことは根本的にカウツキーの理論に問題があったことを示す。すなわち、彼には労働者の革命性に対する自然成長的な認識と小ブルジョア層と農民層の社会的役割のあやまった理解があったのである。

カウツキーが、資本家と労働者との対立は、「橋渡しのできない」ものとみとめていたことはすでに指摘した。問題はこの内容にある。カウツキーは、すでに労働者が自然成長的に社会主義的意識をもつとはいえず、この社会主義的意識は労働者に外からもちこまれねばならないという考えを示していた。<sup>60)</sup>彼はこの根拠を『権力への道』においては次のように展開している。「かれら(プロレタリアート)の意識された意欲は、この場合、かれらのさしあたりの個人的要求をふくんでいるにすぎない。ここから生ずる社会的な改造はさしあたり斗争者にかくされたままである。」<sup>61)</sup>意識されていない社会改造という目的を認識させ、プロレタリアートの力の浪費をおわらせ、この目的に集中させることが社会民主主義の理論の役割である。このようにのべることによって、カウツキーは、「個人的要求」と「社会的改造」とを対立さ

56) Der Weg zur Macht S. 111. 訳, 269頁.

57) F. Engels, Marx Engels Werke, Bd. 7, SS. 523-4. 訳, 『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店) 第7巻, 533頁.

58) ibid., S. 524. 訳, 同上 534頁.

59) Vgl. Der Weg zur Macht, S. 95. 訳, 『権力への道』254-5頁.

60) Vgl. Kautsky, Die Revision des Programms der Sozialdemokratie in Österreich, in: NZ. 20, i, S. 79.

61) Der Weg zur Macht, S. 50. 訳, 214頁.

せるのみである。だが労働者が即目的には、自然成長的には「個人的要求」をもつにすぎないという立論は、けっして労働者が自然成長的に社会主義の方向にむかうことを否定するものではない。このことは、「プロレタリアートは、社会主義的に考えるにせよ考えないにせよ、これらの（搾取に抵抗するための）実践方法を展開する。社会民主党の任務は、搾取に対するプロレタリアートのあらゆる種類の反応を、政権奪取をめぐる大決戦を頂点とする目的を意織した統一行動へと、集結させることである」<sup>62)</sup>にも明白にあらわれている。

以上のカウツキーの考えは、『なにをなすべきか』で展開したレーニンの自然成長性と外部注入の理論とは明白にことなるものである。レーニンの理論は、労働者がブルジョアのイデオロギーの影響をうけているがために、即目的には自然成長的には社会主義的意識をもてないということを中心としていた。<sup>63)</sup>レーニンはこの理論にもとづいて、労働運動内にあらわれるブルジョア的影響を重視したのである。だが、前述のカウツキーの理論からはこの方向は生れてくるはずがなかった。<sup>63a)</sup>

カウツキーのこのような理論から逆に生れたことは次のことであった。

第1に、労働運動内にあらわれた改良主義、修正主義を、ブルジョア的影響をうけたものあるいは労働運動内のブルジョア的な潮流とみるよりも、たんに理論のあやまりであるとみることになり、そこから終始ぬけだすことができなかった。

第2に、労働者階級の斗争に経済斗争と政治斗争との区別<sup>64)</sup>をたてるだけになり、政治斗争は即社会主義のための革命斗争に接続するものとみなすことになった。カウツキーはいう。「プロレタリアートがその経済上の向上を

62) *ibid.*, S. 24. 訳, 192頁.

63) レーニン『なにをなすべきか』『全集』第5巻所収, 356頁参照.

63a) Cf. Raides Larsson, *Theories of Revolution*, 1970, p. 205.

64) カウツキーがベルンシュタイン修正主義を批判するときも、この区別しかなかったことは注目すべきである。



さらに遂行しうるために、このような(政治的権力関係と諸制度の)変革がプロレタリアートにとって緊急必要事であることが明らかになれば、同時に政治斗争、権力移動、変革の必然性もまた与えられる」と.<sup>65)</sup> ここには、レーニンの「組合主義的政治」<sup>66)</sup>あるいはまたローザ・ルクセンブルグの「政治的改良斗争」<sup>67)</sup>という概念と認識はなかったのである。むしろ、カウツキーはこの点では修正主義者と同じ地平にたっていた。カウツキーの次の言葉「われわれマルクス主義者は、修正主義者が改良と積極的な仕事と語るものを階級斗争とよぶのだ」<sup>68)</sup>は、この関係をみごとに示している。

以上の理論的特徴にみられることは、カウツキーが、日和見主義の危険とたたかわずに労働者の、そして党の革命性に楽観性をいいていたことを示している。

この労働者階級の把握に対して、カウツキーは中間層・小ブルジョア層が帝国主義の側に移行しているとみた。カウツキーは帝国主義のもとでは「反動的大衆」が実現されているとみた。しかも、この時点においては、カウツキーがみずからたてた任務、すなわち「民主主義の獲得と軍国主義の除去」の斗争においても小ブルジョア層が反動化しているとみたのである。カウツキーの結論は「プロレタリアートはきたるべき斗争においては忠実な同盟者をえる展望は全くない」<sup>69)</sup>ということであった。他面、カウツキーは、小ブルジョア層の本来的な動揺性からして「目下のところ小ブルジョアがわれわれにいかに対立していようとも、現在の秩序の強固な支柱となるようなことはほとんどない。」ともいう。<sup>70)</sup> こうして、カウツキーはこの時点では小ブル

65) Der Weg zur Macht, S. 94, 訳, 254頁.

66) レーニン, 前掲書, 430-1頁.

67) ローザ・ルクセンブルグ『大衆ストライキ・党および労働組合』、『ローザ・ルクセンブルグ選集』(現代思潮社)第2巻所収, 249頁.

68) Kautsky, Reform und Revolution, in: NZ. 27, i, S. 253.

69) Der Weg zur Macht, S. 94, 訳, 254頁.

70) ibid., S. 109, 訳, 268頁.

ジョアを殆んど無視したのである。

かくして、カウツキーは、帝国主義の作りだした戦争と革命との二者択一を含む革命的状況において、同盟者をもたないで孤立しているプロレタリアートが従来の戦術手段をもちいて「民主主義の獲得と軍国主義の除去」の斗争をおこなうことを提起したのである。これが、『権力への道』でカウツキーが示した全体構造であった。

ところで、この『権力への道』の全体構造に関連して従来のべられてきたことは、カウツキーにおける、革命的状況と従来の戦術手段の使用との結びつきの問題についてが主である。<sup>71)</sup> その典型的なものとして、Carl Schorskeの表現を示そう。「『権力への道』はその本質において、急進派が1905—6年の嵐の日々に放棄していたエルフルト綱領の総体への復帰を示した。カウツキーは未来の予測では以前より明確に帝国主義の革命的 content について断言した。しかるに、彼の未来の革命的過程の分析は、彼が労働者階級とその党に示した受動的役割のために注目すべきである。」<sup>72)</sup> ショルスケが、「エルフルト綱領の総体への復帰」あるいは「受動的な役割」の提示というとき、それらが、カウツキーにおける「帝国主義の革命的 content」と矛盾をもっていることを意味させている。だが、カウツキーに則してみたとき、その主要な側面においては両者はけっして矛盾をもっているわけではない。

たしかにカウツキーは、従来の戦術を指摘し、非同盟の路線を指示していた。しかも、これはカウツキーにおいてはまさに革命的状況の規定と統一されるものとして指示されたのである。そして、この統一を保障する最大の要因は、革命的状況の規定のほうにあったのである。すなわち、その要因とは「帝国主義の停滞」論であった。

71) ラシツァも、イルリッツも前掲論文でこの関係に最大の問題をみている。さらに、Vgl. Ursua Ratz, Briefe zum Erscheinen von Karl Kautskys "Der Weg zur Macht", in: International Review of Social History, Vol. XII—1967, Part 3.

72) Carl E. Schorske, German Social Democracy, 1955, p. 114.

また、『権力への道』は SPD の「エルフルト綱領の総体への復帰」にはちがいないが、それはまたカウツキーなりにエルフルト綱領を帝国主義の時代に対応させたものである。エルフルト綱領(1891年)は、ただ「全世界の資本主義的生産様式を特徴づける傾向が叙述されている」<sup>73)</sup>のであって、ドイツ資本主義とドイツ国家権力の性格についてはなんら言及していないし、また帝国主義、独占の問題にも言及していないものである。<sup>74)</sup>エルフルト綱領の核心は「ブルジョアジーとプロレタリアートとの間の階級斗争はますます尖鋭化する。この階級斗争は、近代社会を二つの敵対する陣営に分離する…」<sup>75)</sup>ことにあり、その将来のみとおしは、恐慌による「全般的不安定性を社会の標準状態とする<sup>76)</sup>」ことにあったのである。このような綱領が、帝国主義の時代にどのような基準をあたえるかが問われたときの答がカウツキーの『権力の道』である。カウツキーは、帝国主義の特徴を早くから組織にみっていたのであって<sup>77)</sup>、『権力への道』においても「相反する利害の対立自体は組織を通じてはるか露骨なものとなる」<sup>78)</sup>とみ、革命の条件の一つとして、「二、組織された大衆をもった、(政府に対して)不倶戴天の一大反対党の存在<sup>79)</sup>」をかかげているのである。いわば、エルフルト綱領を、帝国主義、独占の特徴とみた組織化にもとづいて具体化したのが、『権力への道』であった。

このように、カウツキーの論理自体は大きな矛盾をもっていたとはいえない。しかし、矛盾は、カウツキーの論理と現実とのあいだにあった。

73) Kautsky, Die Agrarfrage in Rußland, in: NZ. 24, i, S. 412.

74) 従来、エルフルト綱領に関して、多くの場合、ドイツのコンカートウムの分析がないことがいわれてきている。綱領全体に関する評価に、西川正雄「ドイツ第二帝政における社会民主党」、『西欧世界と社会主義』所収 1966年 がある。

75) Der Erfurter Programm (1891), in: Revolutionäre deutsche Parteiprogramme, 1967, S. 82.

76) *ibid.*, SS. 82—83.

77) Vgl. Kautsky, Der Kapitalismus fin de siècle, in: NZ. 12, i.

78) Der Weg zur Macht, S. 38. 訳, 204頁.

79) *ibid.*, S. 66. 訳, 231頁.

## II

われわれは、『権力への道』それ自体を論じてきた。そこでは、カウツキーは、現在、革命的状況に入っているので、SPDが従来の戦術にしたがって権力への道を進むことを示していた。

だが、ドイツの現実は一層進んでいた。カウツキーの理論はこの現実にどのように対応していったのであろうか。これが問題となる。

『権力への道』が出版された直後の1909年6月に、ドイツ帝国に政変が生じた。この政変は、SPDの1890年来とってきた路線に大きな影響を与えた。

簡単にこの政変について検討しよう。1907年1月にホッテントット選挙といわれる帝国議会選挙がおこなわれた。この選挙は、まっこうからドイツ帝国主義の対外政策の是非を問うたものであった。選挙で勝利をおさめたのは、保守党と自由派諸党であり、両党は、議会から独立していた帝国政府の議会での支持ブロックをつくった。他方、SPDは、得票数は、ふやしたものの議席数を大巾に減少させたのである。この選挙において、重要なことは『非愛国的とレッテルのはられた政治家は破滅する』という教訓<sup>80)</sup>をのこしたことである。SPDにもこの「教訓」は滲透した。同年夏の第二インターナショナルのシュトゥットガルト大会にはSPDから大量の植民地容認論者が出席したことはまさにこのあらわれであった。<sup>81)</sup>

勝利したドイツ帝国主義の世界政策は、イギリスとの軍備競争を強めていった。それは又、1907年に恐慌におちいったドイツ経済を、軍備拡張一とりわけ、海軍力のそれ—によって脱出させることでもあった。ここに、この財源をどのように捻出するかをめぐる財政改革問題が登場してきたのである。

ブロックをつくっていた保守党と自由派諸党はこの財政改革問題では対立

80) 飯田収治「今世紀初頭ドイツにおける国内政治の一側面」、『金沢大学法文学部論集史学篇』第十五卷所収。とりわけ87-8頁。

81) レーニン「シュトゥットガルトの国際社会主義者大会」『全集』第13巻、76-7頁参照。

し、帝国議会は政府提出の財政改革案を否決した。<sup>82)</sup> このことを直接の契機とし、他方で、「ディリー・テレグラフ事件」などで国際的にも窮地におちいていたカイゼル・ヴィルヘルム二世との不和<sup>83)</sup>も一因となって、1909年6月帝国宰相ビュウローの辞任が生じ、新たに、ベートマンが帝国宰相に就任し、議会内の支持ブロックも保守党・中央党に変化したのである。

この「政変」は、それゆえ、ドイツ帝国主義の世界政策そのものから生じたのではなく——実際、ベートマンの対外政策は基本的にビュウローのそれを変更するものではない<sup>84)</sup>——、その国内体制の確立の問題から生じたものであった。政局は内政改革に集中したのである。

この「政変」に対応してもっとも活発に動きはじめたのが SPD 内では右派であった。右派にとっては、ビュウロー・ブロックの解体によって、はじきだされた自由派諸党が野党となり、「社会民主党に接近する気配を示した」ので、保守・中央党の新ブロックに対抗する「ベッサーマンからベーベルまで」の大ブロックをつくる可能性があるかにみえた。<sup>85)</sup> ショルスケは「ビュウロー・ブロックの解体は、どの社会民主党員にとってもよいニュースであった。しかし修正主義者にとっては、それは、ちょうど1905年のロシア革命が急進派に与えたような精神的高揚をあたえた。……党はその『革命的孤立』をやめて人民の多数をつかむような改良のための巾広い連合をつくらねばならない」<sup>86)</sup> という主張が党内に強力になる状況を生みだしたとみている。それはまた、右派に世界政策よりも内政改革を優位させる志向を生みだ

82) 広田司朗『ドイツ社会民主党と財政政策』115—9頁参照。ならびに、村瀬興雄『ドイツ現代史』「増補版」158—160頁参照。

83) 村瀬、同上、160—2頁参照。この事件をも一因として SPD 内に「個人支記」が問題とされた。このカイゼルの問題にたいするカウツキーの態度は『権力への道』の第一版への序文に示されている。

84) Vgl. Gerhart Lütken, Deutschlands Außenpolitik und das Weltstaatsensystem 1870—1922, S. 78., G. Hallgarten, Imperialismus vor 1914, Bd. ii, S. 152.

85) 村瀬、前掲書、162頁。飯田、前掲論文、88—9頁参照。

86) Schorske, op. cit., p. 163.

したのである。<sup>87)</sup>

だが、攻勢は、右派からばかりではなかった。「政変」にみられるドイツ帝国の政情の不安定さは、帝国主義政策の進展と、その支柱となっているブルジョアジーとユンカーとの支配との矛盾のあらわれでもあった。このあらわれのもう一つが、1910年になってふたたび表面化したプロイセン邦議会選挙法改革問題である。プロイセン邦議会の三級選挙制度はプロイセン・ユンカーのドイツ帝国支配の重要な槓桿であった。<sup>88)</sup>そして、この三級選挙制度はSPDのプロイセン邦議会への進出を阻んでいたのである。それゆえ、SPDにとっては、ユンカー支配の打倒のための手がかりをこの選挙制度改革にもとめたのであり、その大衆的運動は1908年に時の宰相ビュウローに改革を約せしめるまでにいたっていた。この改革案は1910年の1月に提示されたが、それは実質的には旧来のものと変りがなかった。<sup>89)</sup>ここに巨大な大衆行動的  
改革運動がプロイセンのみならず帝国全域の都市で展開されたのである。<sup>90)</sup>

さらに、ドイツ経済は、1907年恐慌から脱して一定の好況をていしていたとはいえ、1910年はいまだ過剰生産になやみ、物価騰貴を生みだしており、労働者の賃金水準は1908年水準に達していなかったのである。4月から6月にかけては、16万人におよぶ鉱山労働者のストライキがみられ、「1910年はストライキの年」でもあった。<sup>91)</sup>

選挙制度の大衆的な改革運動の広汎なもりあがりや労働者のストライキの頻発とは、左派に高揚を与えた。左派——いまでは急進左派とよぼう——は議会・選挙斗争と議会外の大衆行動、ストライキとを結合する志向を示し、従来の戦術の革新を求めたのである。

---

87) 1912年のモロッコ事件におけるモルケンブーアの第二インター書記局あての手紙はまさにこのことをしめしている。続拙稿で問題にしよう。

88) 三級選挙制度については、村瀬、前掲書、112—118頁 参照。

89) 同上書、165—166頁参照。

90) この経過については、同上書、166—172頁参照。

91) A. Feiler, Die Konjunktur-Periode 1907—1913 in Deutschland, 1914, S. 87—88.

一方での、右派からのブルジョア政党との連合による議会内での内政改革の推進の動き、他方での急進左派の議会内斗争と議会外の大衆行動とストライキとを結合させようとする動きが、1909～10年の SPD にあらわれたのである。両翼は正反対の方向ではあるが、いずれも従来の党の戦術の変更を要求したのである。これは、再分割斗争に本格化することによってのみ脱出しようとするようなドイツ帝国主義の内的危機の反映であった。

この状況にたいして、カウツキーは、たしかに革命的状況に入っているが、従来の戦術の継続でよいとだけするわけにいなかった。今度は左右両派にたいし、とくに急進左派にたいして、従来の戦術の継続がなにゆえに必要かを明らかにせねばならなかったのである。カウツキーは、これを、ローザ・ルクセンブルグとの大衆ストライキ論争においてしめたのである。

1910年に展開された大衆ストライキ論争は、党内論争としては従来のものとはことなつた性格をもっている。それは、従来、右派、修正派に対抗してきた左派内部——もちろんすでに1905年のロシア第一次革命を契機にしてその内部に二つの潮流があらわれはじめてはいたが——での論争であった。この論争をつうじて、左派は中央派と急進左派とにわかれ<sup>92)</sup>、右派との関係を従来とことならしめ、SPD の改良主義政党化に一段階を画することになるのである。<sup>93)</sup> この論争を通じてカウツキーとルクセンブルグとはそれぞれ中央派、急進左派の理論的代表的代表者としてあらわれることになる。

大衆ストライキ論争は、ルクセンブルグの論文「さらになにを」によつてもたらされた。選挙制度改革を要求する街頭デモンストレーション・集會が高揚しているさなかの3月、ルクセンブルグはその一層の高揚をめざして大衆ストライキを用いるよう主張したのである。彼女はいう。「最近の迫力にみちた街頭デモンストレーションはそれ自体がすでに社会民主主義者の斗争形

92) SPD 内の中央派の生成については、「帝国主義とプロレタリア革命の時代の評価」に関わらしめて論じるべきである。Vgl. Laschitzka, op. cit., S. 801.

93) Vgl. ibid., S. 799.

態のよろこばしい革新である」「世界最強の労働組合組織と世界最大の数の選挙人にとり支持されているドイツ社会民主党は……大衆行動を行うことができるか。それとも……決定的瞬間に有効な大衆行動をよびおこすことができるのか、ふたつにひとつだ」と。<sup>94)</sup>彼女のこのよびかけに対し、党の事実上の中央機関紙 Vorwärts も、カウツキーの編集する Die Neue Zeit も掲載を拒否した。そればかりでなく、カウツキーは、Die Neue Zeit に「いまやなにを」を發表し、公然とルクセンブルグ批判を開始したのである。

カウツキーの反論は次のことにあった。大衆ストライキは SPD ですでにみとめた一つの斗争手段である。大衆ストライキは、そもそもデモンストレーションの手段と強制の手段とにわけられる。前者はさしあたり問題ないが、後者は「われわれの最後の手段である」がゆえに、1905年のロシアのような革命においては有効だが、1910年の「プロイセンには、われわれはまださしあたり革命をもっていない」のであり、大衆ストライキの実施は問題にならない、と。<sup>95)</sup>

カウツキーは、今日のプロイセンの状態を条件として戦術を發展させる必要をみとめ、「消耗戦略」と「壊滅戦略」とを提起する。「消耗戦略」は、カウツキーにおいては、エンゲルスの「『フランスにおける階級斗争』の序文」の規定にもとづくものとしてあり、一定の民主主義的権利の利用にもとづくものであった。それは「壊滅戦略」＝革命への移行を準備するものとしてあり、その移行は、「われわれの党の従来の消耗戦略の継続が不可能となり、あるいは党が困難に面しているかどうか」の判断にかかっている。<sup>96)</sup>この移行過程における手段こそ大衆ストライキである。プロイセンにおける現状はまだそこにはいたっていないのである。それではなにを。そもそもプロイセンの選挙法改革はユンカー支配の転覆を意味している。今日のプロイセンに

94) ローザ・ルクセンブルグ「つきはなにを」『選集』第2巻、110—117頁。

95) Kautsky, Was nun? in: NZ. 28, ii, SS. 34—35.

96) ibid., SS. 37—40.



おける大衆の高揚の原因を問うならば、全世界的な国際的現象をユンカー支配がより尖鋭化しているところにあり、「ユンカー制度には、労働大衆のみならず、ブルジョア世界の広い層もますます強く対立している。」そしてこの層は、SPD 支持にまわってきているのだ。<sup>97)</sup> したがって、きたるべき選挙でわれわれは125議席はこえるであろうし、そうならば「きたるべき選挙はこの制度をその基礎からゆるがすことになるろうことは疑いえない。」だから、展望がなく、状況に支配される大衆ストライキではなく、きたるべき帝国議会選挙をめざすべきである。以上がカウツキーのルクセンブルグへの反論であった。<sup>98)</sup>

論争は、上記のこの論文を出発点としておこなわれた。ルクセンブルグとカウツキーとの論点のちがいのいくつかはすでに、1903—1906の第1回目の大衆ストライキ論争においても存在していたものである。

〔補論〕 1903—06年に SPD 内でおこなわれた大衆ストライキ論争全体<sup>99)</sup>は、今度のカウツキー、ルクセンブルグ間の論争の原型とはいえない。そのときの論争の焦点は、右派と左派とのあいだで政治的大衆ストライキを党の戦術としてみとめるかどうかにあったのである。<sup>100)</sup> とはいえ、ロシア第1次革命とその影響下でのプロセイン選挙制度改革運動の推進が、すでに左派内部でのニュアンスのちがいを明確にしはじめていたことには注目する必要がある。すなわち第1に、ロシア革命の経験をどのように学ぶか、第2に、ドイツにおいても大衆ストライキを実施すべきかどうか

97) *ibid.*, SS. 72—75.

98) *ibid.*, SS. 77—79.

99) このときの論争については、Vgl. Günter Griep, Über das Verhältnis zwischen der Sozialdemokratie und den freien Gewerkschafter während der Massenstreikdebatte 1905—1906 in Deutschland, in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, XI, 1963, Heft 5.

100) ローザ・ルクセンブルグの戦術がそうである。ルクセンブルグのヘンリッテ・ロラント＝ホルストあての手紙、1905年、10月2日付、フレーリッヒ『ローザ・ルクセンブルグ』（東邦出版社）所収、191—2頁参照。

か、が問題にされた場合には、左派内でも見解がわかれたのである。ルクセンブルグとカウツキーとのあいだにも次の基本的なちがいが存在していた。ルクセンブルグは、はやくも、大衆ストライキを「……議会での小戦争からぬげだし、基本的な大衆斗争の時代に入りたがっている」状況において「戦術の革新」としてとらえようとしていた。<sup>101)</sup> これに対し、カウツキーは「ドイツの特殊な政治的關係においては、実りある大衆ストライキは、革命的状況でのみ考えられるが、革命的になりえないような状況で用いることをねがうならば、成果をのぞみえず、まさに有害であろう」とみっていたのである。<sup>102)</sup>

反論論争は、種々の論点を含んで発展した。ルクセンブルグのカウツキーへの反論「消耗か斗争か」を取上げ、ルクセンブルグの見地をも紹介しておこう。

ルクセンブルグの反論は次のことにあった。カウツキーの大衆ストライキの分類は、「生活によって混同される」ものである。<sup>103)</sup> そして、「ドイツにおいても、プロレタリアートの支配的反動への嵐のような対決の時にいたればいたるほど、われわれの諸関係にとって革命的な状態の現象はあてはまるようになる」のであると。<sup>104)</sup> ルクセンブルグは、カウツキーとのちがいの根本の一つを次の点にみている。プロインセン選挙運動を「ブルジョア自由主義の意味において、彼らとの同盟として、一つの政治的な憲法斗争としてみちびくのか」ということである。彼女の答は、それを「社会主義的階級斗争の一部分」としてみることにあった。<sup>105)</sup> さらにまたカウツキーの大衆ストラ

101) Rosa Luxemburg, Die Revolution in Rußland, in: NZ. 23, i, S. 572.

102) Kautsky, Die Fortsetzung des japanischen Sieges und die Sozialdemokratie, in: NZ. 23, ii, S. 493. カウツキーは、同時に党内に「政治的大衆ストライキの考えに対するなだれのような関心の増大」とともに「プロレタリアートのなかに議会に対する増大する軽視」が生れているとのべている。ibid., SS. 493, 495. また、このときから両者のちがいは、大衆ストライキをルクセンブルグが階級闘争の形態とみていたのに対し、カウツキーはそれを手段とみていたことにも存在する。Vgl. Antonia Grunenberg, Die Massenstreikdebatte, 1970, S. 38.

103) Rosa Luxemburg, Ermattungs oder Kampf?, in: NZ. 28, ii, S. 263.

104) ibid. 105) ibid., S. 265.

イキ論は無政府主義的亡霊にすぎない。今、問題となっている大衆ストライキは「議会主義の対立物ではなく、その補充として考えられているのである。」<sup>106)</sup> これに反対するカウツキーは、議会主義以外のなにものでもない(Nichtalsparlamentarismus).<sup>107)</sup> 大衆ストライキは、大衆の覚醒のためにおこなわれるのである。カウツキーは、「新たな道でよろこびすすんでいる党の運動を、ふたたび古くからはきふるされた純粹の議会主義のルールにねじまげる」と。<sup>108)</sup> これがルクセンブルグの結論であった。

もはや、両者の相違は明白である。ルクセンブルグは、大衆ストライキをふくむ大衆行動を基礎にし、そのうえで議会斗争を成立させようとしたのであり、カウツキーは、議会を基礎にしたため、大衆行動を否定はしないが、小戦闘になる可能性をもつとみた大衆ストライキを、決定的な日まで否定したのである。

この基本的にことなつた路線から多くのちがいを生みだした。ルクセンブルグは、プロイセン邦議会選挙制度改革運動をプロレタリアの運動に、社会主義的階級斗争の一部にみちびこうとしたのに対し、カウツキーはむしろ、ユンカー対反ユンカーの線で考え、反ユンカー層を選挙において獲得する機会とみなすというちがいも生みだしていた。両者は、他面では、大衆の革命性をひきだすことに重点をおくか、それとも成果をみちびかない斗争は「消耗戦略」のもとではやるべきではない、というちがいをも示した。

これらのちがいは次の論点にも影響している。

第1点は、ロシアとドイツとの共通性と相違とのどちらかに力点をおくかということである。ルクセンブルグは、カウツキーが「革命的ロシアと議会主義的な西ヨーロッパとの対立」におちいつていると批判する。<sup>109)</sup> ルクセ

106) *ibid.*, S. 294.

107) *ibid.*

108) *ibid.*, S. 302.

109) Luxemburg, *Die Theorie und die Praxis*, in: *ibid.*, S. 576.

ンブルグにとっては問題は「ブルジョアの議会主義の範囲での平穩な発展の長い歩みと比して、革命的な時期の嵐のような歩みの利益」<sup>110)</sup>が問題なのであった。これに対し、カウツキーの見地は次のことにあった。「一国で憲法がより民主主義的になればなるほど、大衆ストライキの条件はますます少なく与えられる」と。<sup>111)</sup>民主主義的権利をもたないロシアの労働者にとっては大衆ストライキは生命的必然性をもつが、ドイツの労働者にとっては、唯一の可能性ではなく、勝利にいたる他の手段をももっている。<sup>112)</sup>それは当面、選挙ですすみ、決定的瞬間に勝利することである。

第2点は、ルクセンブルグの提起した「共和国」のスローガンである。ルクセンブルグは、エルフルト綱領の政治的要求の総括としての共和制のスローガン<sup>113)</sup>は「ドイツのミリタリズム、植民地政策、ユンカーの優位、プロイセン化にたいする事実上の挑戦状である。つまりそれは支配的反動のあらゆる部分的なあらわれにたいしてわれわれが日常におこなっている斗争の、論理的帰結であり、徹底的な総括なのである。……(これは)プロレタリアートによる政治権力の奪取にいたる、さらに社会主義の実現にいたる偉大な行程のうちの、ささやかな段階を画するものでしかない」<sup>114)</sup>と位置づけられて主張された。ユンカー・プロイセンと独占ブルジョアジー支配のドイツ帝国の共和国化というこのスローガンが、革命の課題であるのかは必ずしもはっきりしないし、また他の階層との関係もはっきりしないまま(むしろルクセン

110) *ibid.*, S. 572.

111) Kautsky, *Zwischen Baden und Luxemburg*, in: *ibid.*, S. 665.

112) Kautsky, *Eine neue Strategie*, in: *ibid.*, S. 369.

113) Engels が、エルフルト綱領草案(幹部会草案)に統一共和国がぬけていることを批判していることは周知のことである。Vgl. *Werke*, Bd. 22, SS. 233—6. なお、カウツキーは、この草案の政治的要求の最初の二つの項目が「共和国」要求にあたとみるのみで、それを表現することはせずに、「*Neue Zeit* 編集部草案」をつくり、これがエルフルト党大会で綱領として承認された。Vgl. Horst Bartel, *Der interne Juni-Entwurf zum Erfurter Programm*, in: *International Review of Social History*, Vol. XII—1967, Part 2. 西川, 前掲論文参照。

114) ローザ・ルクセンブルグ, 「種まきの時期」『選集』第2巻所収, 126頁。

ブルグは前出した引用句にみられるようにプロレタリアートのみの課題としていたよう(におもわれる)ではあるが、ここにはルクセンブルグの当面する政治目標に対する政治的感覚のするどさが疑いなくあらわれている。だが共和制のスローガンは、SPDの内部では、また急進左派内でも十分な賛同をえられなかった。カウツキーの、このスローガンに対する反論は、「われわれは、社会主義に対応する唯一の政治形態が民主主義的共和国であるということからすでに共和主義者である。君主制は、ただ階級の相違と階級対立の基礎のうえに成立する。階級の止揚が君主制の止揚を条件づける」<sup>115)</sup>と反論する。前段においては、カウツキーの、のちにレーニンとソヴィエトに反対する視点、すなわち、ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義の差異をみとめない視点があらわれている。後段においては、——メーリングもこれと同じことをのべているが<sup>116)</sup>——彼の反論は逆転している。階級支配を止揚するためには、現在の国家権力の横樫となっており、矛盾を現実によりはらんでいる君主制の止揚が、重大な意味をもっていること、をみることはできなかったのである。

ところで、この論争は、その基礎に日和見主義の批判という問題をもっていった。レーニンによるこの論争に関連させたSPDの方向についての特徴づけを手がかりにあきらかにしよう。

「ドイツで成長しつつある革命は、他の国々の革命前の時代とは似ていない、だからまたプロレタリアートの指導者たちでいくつかの新しい任務の解決を要求している特別な、独特の政治情勢におつかっている。……ドイツ社会民主党は、約半世紀のあいだ、ブルジョア的法秩序を模範的に利用し、最良のプロレタリア組織と卓越した出版物をつくりだし、社会主義的プロレタ

115) Kautsky, Zwischen Baden und Luxemburg, in: NZ. 28, ii, S. 654. この文章は、1904年の Der Kongress zu Amsterdam, in: NZ. 22, ii, S. 675. の引用である。

116) Vgl. F. Mehring, Der Kampf gegen die Monarchie, in: NZ. 28, ii, SS. 609—612.

リア前衛の自覚と結束とを(資本主義のもとでは可能なかぎりの一(レーニン))最高水準に高めた。いまやドイツ史のこの半世紀の時期が、他の時期と交替しなければならないときが、客観的な原因の結果交替しなければならないときが近づいている。ブルジョアジーがつくりだした法秩序を利用する時期が、最大の革命的闘争の時期と交替しようとしている。しかもこの闘争は、本質の点ではブルジョアの法秩序全体の、ブルジョア体制全体の破壊となるであろうし、その形態の点では、ほかならぬ自分がつくりだしたが、自分にとってはたえがたいものとなった法秩序から解放されようとする、ブルジョアジーの途方にくれた空しい努力ではじまるにちがいない。……現在の時期の評価についてのルクセンブルグとカウツキーとの意見の相違、すなわち……転換点の一つの到来するのがいまか、またはまだますますではないか……(は、第一級の意義をもたない意見の相違(であろう。)]<sup>117)</sup>

レーニンのこの特徴づけは、そのみとおしの点であやまりをおかしているといえよう。

彼はSPDの従来路線をみとめ、その転換を示唆している。しかもこの転換は、他ならぬブルジョアジーによるブルジョア民主主義の破壊によって招来されるとしている。さらに、文面からみるかぎり、ドイツと他の国々、とくにロシアとはことなるものととらえられている。以上の点では、レーニンはむしろカウツキーに近い認識を示したのである。<sup>117a)</sup> そのさい、レーニンは、SPDの右派が、社会主義をばブルジョアの法秩序のなかにおさまきると考えていると適切に指摘している。<sup>118)</sup> だが、レーニンは、理論上の日和見主義でなく、主として実践上の日和見主義がすでにSPDの指導部にまでおよんでいること、さらにカウツキーにもおよびはじめていることをみのがし

117) レーニン、「二つの世界」、『全集』第16巻 328—9, 330頁。

117a) Vgl. A. Reisberg, Lenins Beziehung zur deutschen Arbeiterbewegung, 1970,

S. 119 は、レーニンの認識をルクセンブルグに近いとしている。

118) 同上書, 323頁参照。

たのである。したがって、レーニン、ルクセンブルグの大衆ストライキ論が右派批判として、党がはまりこみつつある日和見主義にたいする批判として存在し、カウツキーの主張が客観的にはこの傾向を一面的に弁護する役割をもっていたことをみのがしたのである。

1910年におこなわれた大衆ストライキ論争は、直接、間接の二つの意義をもっていた。

カウツキーとルクセンブルグとの両者のあいだで直接にあらそわれた論争としては、それはドイツの革命運動の二つの路線としてであった。すでにのべたように、この論争で、カウツキーは議会を総括点にする方向で考え、ルクセンブルグは大衆行動を総括点にする方向で考えた。それゆえ、レーニンの強調したドイツにおけるブルジョア法秩序を利用する問題は、ルクセンブルグよりもカウツキーによって代表されたのである。<sup>119)</sup> だが、他面でカウツキーが、成果のない斗争を否定する点では現存する矛盾を全面化しようとするだけでなく、日和見主義的に問題をとらえる傾向を露呈していた。

だが、論争は、間接には、SPDが従来の路線のなかで日和見主義化し、右派が勢力を拡張していくことを批判するか、それともそのような批判を、改良の放棄、ブルジョアの法秩序の利用の放棄として排撃するかという面をもっていたのである。ルクセンブルグは「古くからはきふるされた純粋の議会主義のルール」というとき、日和見主義批判であることを認識していた。カウツキーは、従来の戦術、路線を「消耗戦略」として定式化して追認したとき、右派の日和見主義批判を行うのではなく、それを放置し、むしろルクセン

119) カウツキーはすでにこのことを次のようにのべている。「われわれが、民主主義的自由を基礎にしてうちたてられてきた組織によって、民主主義的形態を利用して、いまだ世界に例をみない権力手段、すなわち、なによりも企業家連合、——それに君主制が屈服しており、その力は一層、絶対主義によって発展させられた近代的国家すなわち官僚制と軍隊という権力手段により強化されている——に対立してたたかいぬく革命的闘争をむかえているのだ、これは世界史においてはじめてのことである。」Kautsky, Die Soziale Revolution, I. Sozialreform und soziale Revolution, 1902, S. 47.

ブルグからの「戦術の革新」に対してだけたかっただのである。

論争をつうじて明らかになっていったことは、ドイツに制限されているとはいえ存在している民主主義の利用という点ではカウツキーが代表しているが、第1に、大衆行動との結合を軽視している点で、第2にこの民主主義の利用ということではけっして排除されない日和見主義を批判しないという点で、カウツキーの立場が右派に接近し、急進左派の批判が従来の戦術の革新を要求する限りは、中央派と右派との連合が実現するという点であった。

以上の論争の性格からみたととき、カウツキーの提起した「消耗戦略」とはいかなるものであろうか。

結論的にいえば、それは、カウツキーなりの帝国主義との対応の戦術の総体を規定したものであった。「消耗戦略」は次の諸性格をもっている。

第1に、帝国主義・独占の時代に特有の組織化に対応していることである。たがいに競争をしてきた資本家階級も企業者連合、資本家団体によって労働者に対する強大な組織をもつようになった。他方、労働者階級も労働組合や党において組織されている。今や、資本家対労働者との対決は組織的対決のときであり、階級対立が激化しつつあるおきには両者の組織をかけた一大決戦にいたるまで、労働者は一步一步すすみ、自分の組織的力量を全体として追求すべきである。「消耗戦略」はこのような認識に支えられていた。

第2に、したがって、一大決戦のときでもなく、労働者の組織が弾圧されるときでもない場合には、組織をかけてまで小戦闘にでるべきではなく、一定の民主主義的制度、権利を利用して進むべきであることを内容としている。

この内容をもたしめられた「消耗戦略」は、客観的にはどのようにとらえられるべきであろうか。カウツキーとルクセンブルグとのあいだでは、この「消耗戦略」がエンゲルスの『序文』の思想と同じものかどうか論じられた。ルクセンブルグは、カウツキーの「消耗戦略」はエンゲルスの思想とは

---

120) Luxemburg, *Ermattungs oder Kampf?* in: NZ, 28, ii, S. 292.



ことなるという。「ブルジョア国家の議会的手段を、日常的な階級斗争に、宣伝に利用しつくすこと、集会、組織」<sup>120)</sup>という戦術に問題があるのではない。エンゲルスは、この戦術手段を、少数者革命に対して大衆的な革命と結びつけたのである。<sup>121)</sup>それゆえ、カウツキーの「消耗戦略」はエンゲルスの「序文」の思想では根拠づけられない、と。このようにいうことによって、ルクセンブルグはカウツキーの問題を適確についた。すなわち、大衆的行動に基礎をおいていないで、ただ議会などの民主主義的権利の利用だけをもとめる「消耗戦略」の弱点を。カウツキーの「消耗戦略」は、エンゲルスの思想を、その大衆的基盤をぬきに継承し、民主主義的権利を一層「発展」させるものである。つけ加えておけば、カウツキーにおいては、利用されるべき民主主義的権利の階級的性格を問わないままであった。

このような「消耗戦略」が行いうる基盤を考えれば、帝国主義に全面的に対応するものではありえないのはあきらかである。カウツキー自身主観的には「壊滅戦略」への移行を準備するという一定の主體的な役割をになわしめていた。それでは、戦争のときにはどうなるのであろうか。カウツキーは、「消耗戦略は戦争においては不可能となり不合理になる」<sup>122)</sup>という。そのときは「壊滅戦略」への移行となるべきである。これがカウツキーの予定であった。この問題は、現実急速に進んでいく軍備拡張にたいしてどのような態度をとるべきかをめぐってのちに現実化する。ここでは、「消耗戦略」は帝国主義の平和な時代にのみ対応しうるものであることを明らかにするとどめよう。

そして、最後に、「消耗戦略」はそれ自体では、ブルジョア的法秩序の枠内にとどめようとする右派の志向と一致し、矛盾をきたすものではなかった。右派と矛盾をきたすのは、後日予定されている「壊滅戦略」をみとめる

121) *ibid.*

122) Kautsky, *Was nun?* in: *ibid.*, S. 68.

かいなかでしかなかったのである。このような性格をもつ「消耗戦略」が右派批判をめざすルクセンブルグの「戦術の革新」に対置されるとき、実践的には右派と融合する役割をはたすことになる。

それゆえ、「消耗戦略」は全体としては、平和な階級対峙の路線である。そのなかで、民主主義権利を利用して、組織的力量と政治力を強化する戦術の総体であった。

カウツキーは、「消耗戦略」を提示することによって、従来の党の路線を追認し、あらためて定式化した。このことによって、カウツキーは、左右両派批判としての中央派の理論的代表者となった。<sup>123)</sup> 彼は次の中央派宣言ともいうべきものを発している。「党はバーデンとルクセンブルグの間を勝利をめざしてすすむであろう。われわれが地図をとりだし、バーデン大公国とルクセンブルグ国をみるならば、それらの間に、カール・マルクスの生れた町、トリエールがあるのをみいだす……地図のかたちは、今日、ドイツ社会民主党の状態の象徴である。」<sup>124)</sup> しかし、右派が従来の路線の変更を主張しないかぎり、実践的にはカウツキーと右派との癒着である。後年、カウツキーは、「1910年以来、党大会毎に多数派は極左派の反逆的性急者に反対するようになった。……これに反してそのとき以来党大会で右派に反対すべき機会は全くない」<sup>125)</sup>とのべていることは、上叙の急進左派と右派と中央派との関係をうらがきしている。

---

123) ヒルファディングも、急進左派が「政治権力をめぐる決定的な大衆闘争に入るべき時がきた」とみていることを、大衆は次の選挙に注目していると、左派の議会軽視を批判して、中央派的立場にたつた。Vgl. R. Hilferding, *Der Parteitag in Magdeburg*, in: *NZ*, 28, ii, SS. 895, 897. 村瀬氏は、「1910年が革命的な年でなかったという決定的な事実……(このドイツの現実がなおしばらくのあいだ『マルクス主義中央派』に陳方していた)とのべている。(前掲書, 179—80頁)。なお、この時期の大衆ストライキ論争と組織問題をあつかった最近の研究に、伊藤定良「1910年におけるドイツ社会民主党の党内抗争」『歴史学研究』No. 371 がある。

124) Kautsky, *Zwischen Baden und Luxemburg*, in: *ibid.*, S. 667.

125) Kautsky, *Der politische Massenstreik, 1914*, S. 247.

126) Schorske, *op. cit.*, p. 186.

このような「消耗戦略」の性格をみると、この立場が「理論的には存在していた」<sup>126)</sup>といえようか。それはもはや革命的な性格をもちえなかったというべきである。

なぜならすでにみたように、「消耗戦略」は平和な時代にのみ対応しうるものであった。だが、まさに事態は平和的な発展をせばめていたからである。だが、カウツキーは逆に、このようなときに、あらためて体系性をもちしめて「消耗戦略」を提起したのである。問題はここにある。これはなぜか。カウツキーには『権力への道』で示した、帝国主義の停滞論とプロレタリアートが戦争勃発を阻止しているという考えがあったからである。このうえになりたつ平和な状態を利用して、急速にプロレタリアートの力を増大させることが可能であるし、またそれを当面しなければならぬ。この点にこそ「消耗戦略」を提起した理由があった。ここから生じてくるのは、平和がつつけばつつくほど、プロレタリアートに有利な状況がつけられることであつた。「壊滅戦略」により早く移行しようということではなく、より有利に移行しようとする——ここに、1910年にあらためて「消耗戦略」として定式化する根本の、しかし表面化していない一理由があつたのである。

だが、いうまでもなく、帝国主義は、停滞の事態を再分割斗争へ、しかもその暴力的解決としての戦争に急速にすすみつつあつた。カウツキーの「帝国主義停滞」論は、再分割斗争の無視のうえになりたつていたのであり、「消耗戦略」はそのうえに、平和を条件としてなりたち、戦争にむけて、準備されたものではなかつたのである。

## 小 結

以上で考察した『権力への道』と「消耗戦略」との関係はいかなるものか。

『権力への道』は、そのもっとも積極的な面において、今や革命の時代に入り、まちうけているものは世界戦争か革命かの二者択一である、ということを示した。

だが、その後のルクセンブルグとの論争においては、大衆ストライキの実施を拒否し、従来の戦術の継続を内容とする「消耗戦略」を提起したのである。そのさいもっとも論拠としたのは、「しかるにさしあたりわれわれはプロイセンにまだ革命をもっていない」という認識であった。

1909年と1910年のこの典型的な叙述の面からするならば、カウツキーが従来の自説を変更したとうけとられるのは当然である。事実、ローザ・ルクセンブルグをはじめとして、カウツキーと論争したマルクス主義者は彼の変節を指摘してきている。<sup>127)</sup>

ところが、カウツキーは自説を変えたことがないことを主張する。彼の主張は、自説をかえたのではなく、現実の変化に対応したにすぎない、ということにあった。すなわち、1912年に、カウツキーは「それ以来変化してきたのは、私の観点ではなく、歴史的状況であり、私に今や社会発展の他の側面をもっと強調するようにそそのかしているのである」<sup>128)</sup>とのべている。

どちらが正しいかを問う必要はない。両者とも正しいといえよう。ここからいえることは、カウツキーの理論が、現実の変化に対応して、変化し、発展したことである。彼は、1910年をさかいにして、自分の理論を変化させた。彼に即していえば、自分の理論のもっている他の側面を強調しはじめたのである。事実、彼の理論の他の側面が強調されたのである。だが、このことは、その結果、カウツキーの理論が全体として他のものに变化したことを否定するものではない。一言でいえば、カウツキーの理論は、1910年をさかいに、右派批判のための理論から左派批判のための理論に変化したのである。右派批判のための理論としては、革命的状況へ突入したことの確認にまですすんだが、左派批判のための理論としては、だからといって従来の戦術を変更することはないことを主張するものになったのである。

127) Vgl. Rosa Luxemburg, Die Theorie und die Praxis. in: NZ. 28, ii, S. 635.

128) Kautsky, Der improvierte Bruch, in: NZ. 30, ii, S. 517.

実際、すでにみた『権力への道』においては、革命的状況の確認は戦術の不変更と結びついていたのである。このことを、ラシツァは次のようにのべている、「カウツキーは、なるほど帝国主義、軍国主義、軍備拡張に反対する闘争と民主主義に賛成を表明したが、まさに一般的なかたちで、長年にわたって革命的民主主義者によっておこなわれているかたちでしかなかった」<sup>129)</sup>と。だが、ラシツァは弁証法が貫徹していないことに一因があるとしているが<sup>130)</sup>、これでは不十分である。なぜなら、ここに、カウツキーの理論的な首尾一貫性があらわれているからである。すなわち、彼にとっては、帝国主義とは組織の時代であり、「プロレタリアートが、経済的に不可欠で、大部分しっかりと固く組織されていてしかもその階級的地位についても国家や社会の本質についても啓蒙された、一大集団にまで成長している」<sup>131)</sup>ことが不可欠であった。この首尾一貫した理論にもとづく従来の戦術にとっては政治斗争が主となっているということにもとづく長期にわたる革命の時代の確認は、矛盾ではありえなかったのである。それだから、カウツキーは、従来の戦術の革新をもとめたローザ・ルクセンブルグの見地を否定し、積極的に、従来の戦術を「消耗戦略」として提起したのである。

それゆえ、『権力への道』も「消耗戦略」も、彼の根本的な思想のことになったあらわれかたであった。だが、カウツキーがルクセンブルグに対して、「消耗戦略」を提起したとき、カウツキーの理論が変質しはじめたことは否定しえない。同時に、エンゲルスから継承したとカウツキー自身がいう根本思想の欠陥があらわれだしたことも否定しえない。

「消耗戦略」の提起は、SPDの左右両派が活発な動きをしたことに対応しているが、これらは基本的にドイツばかりでなく帝国主義世界体制の矛盾の激化に対応していた。一方でのドイツの諸階級の力関係が変化し、他方で、

129) Laschitzka, op. cit., S. 827.

130) Vgl. ibid., S. 826.

131) Kautsky, Der Weg zur Macht, S. 24. 訳, 191-2頁.

カウツキーが「帝国主義の停滞」とみた事態が急速に再分割斗争へとすすみ、平和的發展が急速におわりつつあったのである。

この全社会的危機に対して、「消耗戦略」の提起が意味したことは、第1に、危機の深まりのなかでせばめられつつも残されていた平和な側面への依存であり、そのうえでの労働者の組織的力量的増大であり、第2に、左派とでなく、右派と一致する従来の日常的、改良活動の路線の継続である。そして、このような内容をもった「消耗戦略」は、従来の右派批判においてみられていた改良と民主主義とが革命と結びつけられねばならないことの強調から、改良と民主主義の斗争の強調へと変化し、革命との結びつきを後退させていくことを意味したのである。事実、「消耗戦略」の提起のなかに、われわれは、もはや革命の時代の確認をみることはできず、むしろ、権力獲得のまさにその時ではないという主張をみるだけである。<sup>132)</sup>

それゆえ、われわれは、『権力への道』から「消耗戦略」の提起へいたる過程でカウツキーが、改良斗争を右派とともにおこないながら、右派をして革命を忘れていると批判しているところから、左派を改良、民主主義、議会斗争を無視していると批判し、右派とともにそれを実践するところへ変化、発展しつつあるものをみることができよう。それは、革命の理論から改良の理論への変化、発展である。

同時に、このことはカウツキーの根本理論も、もはやその革命的性格を保持しえない事態に逢着しつつあったことを意味している。

---

132) この点からいえば、帝国主義の安定の側面にカウツキーが対応したといえよう。